

最後のアンサンブル 風に乗せて君と共に

山本純一さん(仮名)は平成2年5月20日生まれ。

南陽市に生まれ、中学校で吹奏楽部に入部。顧問の先生、音楽仲間そしてトランペットと出会いました。お年玉を貯めて購入したトランペットは、社会人になった今でも大切に使用しておられました。音楽を通じて知り合った仲間とは、社会人になっても続いていました。そして、月数回の練習も、片道90kmの道のりをも苦にせず、必ず参加したそうです。

純一さんは仙台市で調理師として勤務。職場で知り合った女性と、結婚を前提に一緒に暮らしていました。休日には、近くの観光地に出掛けては、食べ歩きをするのが共通の楽しみ。コロナ渦が明けたら、晴れて結婚という時に・・・その日は突然訪れました。

夜中、純一さんの異変に気づき救急搬送。病院に到着した時には、既に帰らぬ人になっていました。診断は原因不明の心臓発作。医師に検視を薦められましたが、純一さんのお父さんは、少しでも早く家に連れて帰りたいとの思いが強く、断りました。

自宅へ戻った純一さんには、多くの仲間が会いに来てくれました。枕元には中学時代から使っていた譜面台と、ケースに入ったトランペット。同じパートの仲間が、涙を流しながらケースから取り出し、枕元に置いて下さいました。「最後に何か自分達らしい事を純一くんのためにしてあげたい」と仲間達は思っていたが、同時に「葬儀の場で、楽器など吹いたら不謹慎と思われるかも」と思い、口に出せずにいました。そんな心中を察した智也さんのお父さんは、「ぜひ息子のために、演奏して欲しい」と伝えました。

私達のご家族様の意向を汲み、導師を務めるご住職に、事の経緯を相談しました。ご住職は、趣味で合唱サークルをされているので、快く承諾して下さい、式次第も変更して下さいました。

故人様が歩まれた人生には様々な思い出があり、送る側のご家族、ご友人の皆様方の思いも様々です。その場に立ち合う私達は、その思いを実現するために、担当者3名のチームで取り組んでおります。

これからも、どんな些細な事にも耳を傾け、想いを形にする葬儀のお手伝いに努めていきたいと思っております。